
本当は怖い完全記憶能力

構田 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当は怖い完全記憶能力

【Nコード】

N3104R

【作者名】

構田 巧

【あらすじ】

上条当麻はインデックスに料理ができるようになってほしかった。幸い彼女には完全記憶能力がある。料理本の一つでも読ませることができればそれで万事解決なのだ。

そう考えた上条は何とかインデックスに料理本を読ませようとするのだが……。

（前書き）

どうも、構田巧です。

前回の投稿から一週間たったので、とりあえず再投下。またまたコメディーです。

僕がシリアス書こうとするとどうしても長編になっちゃうので、その場のノリでちょちょっと書くといつもコメディーになるんですよね。

でもシリアスも書きたいな。

上条当麻は思っただ。

居候であるインデックスもたまには料理をするべきなのでは、と包丁片手にインデックスを眺めながら、上条はそんなことを考えていた。

インデックスはというと、居間でゴロゴロとくつろぎながら三毛猫と戯れていた。上条の気も知らないでお昼ご飯はなにかな、などと幸せそうにつぶやくのだ。

作りかけの野菜炒めを前にして、上条当麻は考える。

我が家の食品の大半はインデックスの胃袋へ消えるのだからちよつとくらい手伝ってくれてもいいじゃん、と。いやいやここは一食まるまるインデックス製を目指そう、何事も夢はでつかく、と上条は心に決める。

もやしのパックとフライパンを手早くインデックスの目の届かない場所に隠し、あたかも今から料理を始めるようなフリをする。

「インデックス、ちよつと冷蔵庫の横の本棚から料理本をとってくれ」

今日の目標はその料理本をインデックスに読ませることである。

彼女は完全記憶能力者なので、即戦力になること間違いなし！

「いつばいあるけどれをもって行けばいいの？」

インデックスはすぐに居間からやってきて本棚の前で首をかしげる。

「五分で作る簡単料理一〇〇選」 ってのがあるだろ。それがほしいんだ」

「えーっと、“わがやの朝ご飯” “鶏肉 応用と実践” “だれでもできる蒸し料理” “マヨネーズ” “卵” “豆腐” “ハム” “プリン”……」

聞こえてくる単語がなんだかおかしいので上条がふと見ると、

「ぎゃああああ！ 何やってんだインデックス！」

インデックスが秘蔵のプリンを食べていた。

こちらに背を向けガツガツとものすごい勢いでスプーンを動かしている。

「しかもそれ黒蜜堂の一個七〇〇円もするプリン！ ぐあーっ、あとで食おうと思って大事に隠しておい……とっておいたのにーっ！」

不幸だーっ！ と頭を抱えて絶叫する上条をよそにして、インデックスはまったく悪びれる様子もなく、

「私に内緒でこんなものを隠し持っているとうまが悪いんだよ。私はただ後々争いの種になるであろう魔性のデザートを秘密裏に処分しただけなんだから」

攻めるような口ぶりとは裏腹にとっても嬉しそうなのが、上条にとってはこの上ないダメージな訳だが。そうかそうか、そんなにうまかったかインデックス。

上条が一人うなだれていると、インデックスがようやく料理本を持ってやってきた。

「はい、とうま。でもとうまがレシピ見ながら作るなんて珍しいね。いつもは気の向くまま適当に作ってる感じなのに」

「微妙に失礼なこと言わんでもらおうか。それにこれはおまえが読むの。いいかげん料理を覚えてもらうからな」

するとインデックスは意外なことに、ぱあっと顔を輝かせた。

「ほんと！？ 私も料理する。とうまのお手伝いするんだよ！」

「よし、じゃあ今日は四八ページの野菜炒めを作るぞ。って、やる気だなインデックス」

純白シスターは上条の話も聞かないで、早くも作り方の暗記に入ってしまった。彼女が一通り読み終わるまでしばらく待つことにする。

五分後、料理本から顔を上げたインデックスは自信に満ちあふれ

た表情をしていた。

「カンペキ。私ははやくも野菜炒めを極めてしまったんだよ！」

力強いその言葉に思わず期待してしまう。

「いけそうか」

「当然」

「一人でも大丈夫か」

「もちろん」

「電子レンジで卵を爆破したりしないか」

「とうま、野菜炒めだよ？」

「すまん、インデックスだからつい……」

「……………」

「ごめんなさい」

インデックスの周りに暗黒のオーラが漂い始めたので反射的に謝罪すると、彼女は何事もなかったかのように料理を始めた。

「まず始めにニンジンを千切り……。とうまとうま、聞きたいことがあるんだけど」

包丁の場所だろうか。それならその両開きの――

「千切りってなに？」

……………。

上条はその質問には答えずに、静かに隠したもやしを取り出した。どこか悲しげなその笑顔が完全記憶能力とは無関係に忘れられないのだとインデックスは後に語る。

一ヶ月後。

上条が手取り足取り教えた甲斐もあり、インデックスの料理スキルはそれなりのものになっていた。

片っ端からレシピを覚えて、わからない用語は上条が教えてやる。元々飲み込みが早いのかインデックスの腕はみるみる上達していた。

インデックス自身も完全に料理にハマったようで、ここ最近は一

人で夕食を作って上条の帰宅を待っているということも珍しくはなかった。

上条の目論見はみごと成功したのである。

そんな日曜日のある日のこと。

「今日は俺が昼飯を作るぞ。インデックスはゆっくりしててくれ」
久々に上条が台所に立つと、居間からインデックスが駆け寄ってきた。

「私もっ！」

「いいって。最近おまえ頑張ってるし、休みの日くらいはくつろげよ」

「私もつくる。お料理すきだもん」

そう言って笑うインデックスに感動して、上条は思わず目頭を押さえた。

今日のメニューは野菜炒めだ。

偶然にも一ヶ月前のあの日と同じである。

上条が切り終えたニンジンフライパンで炒めていると、じーっとものすごい視線を感じた。

見れば、隣のインデックスが作業する手をとめて上条の手元を凝視している。より正確にはフライパンを。

その真剣ぶりたるや、まるでまばたきしたら射殺すると脅されているかのようだった。

「あの、インデックス……さん？」

上条がおそろおそろ声をかけると、インデックスはたった一言吐き捨てた。

「違う」

「え？」

「ニンジンを入れるタイミングが間違ってる」

「……、」

「炒める前に軽くゆでるとニンジン本来の甘みが増すばかりか渋み

が薄れていつそうおいしくできるんだよ？ それに最初のうちは強火でいいけどニンジンがしんなりしてきたらあとは中火に落とさなきゃ。切り方も半月切りじゃなくて千切りだし。大した違いはないと思うても火の通り方に差がでるかも。全部とうまの本に書いてたことなのに忘れたの？」

その後三十分にも及ぶインデックスの野菜炒め講義をききながら、上条当麻は思うのだった。

完全記憶能力ってこわいなあ、と。

（後書き）

書いてる最中にデータが全部トんでしまいました。

執筆側の皆さん、保存はこまめにしましょうね（笑）

さて、例のごとく不定期更新なので次作がいつになるかは分かりませんが、今回はここらで終わります。

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3104r/>

本当は怖い完全記憶能力

2011年8月6日03時10分発行